

「第15回ワカサギに学ぶ会」に参加して

真野 修一・隼野 寛史

平成22年11月17日、群馬県前橋市にある前橋テルサ つつじの間において「第15回ワカサギに学ぶ会」が開催されました。今回は平成22年2月に、3年ぶりに山梨県河口湖町で開催されて以来のものでした。

初めに、群馬県水産試験場小林場長から挨拶があり、同試験場佐藤主任研究員の司会により進行していきました。まず、群馬県蚕糸園芸課水産係久下敏宏補佐からの講演のあと、11課題の話題提供がありました。講演、話題の概略は以下のとおりです。



写真1 会場の様子

講演

ワカサギの増殖法と活用法（群馬県の場合）

群馬県蚕糸園芸課水産係 久下 敏宏

- ・会の発展に尽力してこられた芦之湖漁業協同組合の橋川事務局長が3月に急逝された。お悔やみ申し上げます。
- ・群馬県には1923年に移植放流されたとの記録が最初で、その後多くの湖沼へも移植されている。
- ・県内の湖沼は高冷地天然湖、多目的人工湖、農業用溜池、低湿地天然湖の4種に分類される。
- ・県内での増殖は、諏訪湖、網走湖等からの購入卵が多使われているが、自場で採卵される数も増えてきている。
- ・増殖のために多くの湖沼ではシュロ枠が使われている。
- ・仔魚が流下していく際には落下点に水があると死亡率が低くなる。
- ・仔魚には正の走光性がある。
- ・灌漑目的の人工湖では放水による仔魚の流出の可能性

があり、対策が必要である。

- ・ワムシ給餌はふ化直後の生残率向上に寄与する。
- ・ワカサギは他の魚類に捕食されるため、肉食性魚類による影響の調査が必要である。
- ・ハンドリング後の減耗低減には塩水浴が有効である。



写真2 久下氏の発表の様子

話題提供

赤城大沼のワカサギ遊漁

赤城大沼漁業協同組合 青木 泰孝

- ・赤城大沼は標高1,345mに位置し、面積は88ha、深さは最も深いところで16mある。
- ・ワカサギの他に、コイ、ヘラブナ、ハヤ、クチボソ、スッポン、沼エビなどが生息している。
- ・関東地方では最も安定的に氷上でのワカサギ釣りが出来る場所である。
- ・自場で採卵もしているが、諏訪湖、網走湖等から卵を購入し、放流している。

榛名湖のワカサギ遊漁

榛名湖漁業協同組合 野口 正博

- ・榛名湖は標高1,084mに位置し、面積は115ha、深さは最も深いところで12mある。
- ・ルアー釣りも行われているが、ワカサギ釣りに力を入れている。
- ・ワカサギ釣り用のミニドーム船を導入した。
- ・結氷した年としない年では遊漁者数に大きな変動が見られる。

網走湖産シラウオの生活史と漁業の特徴

(地独)道総研 さけます・内水面水産試験場
隼野 寛史

- ・シラウオの生活史解明のため、1) 操業日誌に基づく回遊推定、2) フィールドにおける分布・移動調査、3) 耳石化学分析による生活史履歴の検証、を行った。
- ・資源解析は西網走漁業協同組合の操業日誌からデータを抽出して行った。
- ・網走湖産シラウオの生活史が明らかになった。
- ・耳石の調査結果から、海洋履歴の長い個体、海洋履歴の短い個体、海洋履歴のない個体がいることが明らかになった。
- ・親子の量的関係から密度依存的なリッカー型モデルに当てはまり、資源管理方策としては産卵親魚一定方策が適当と考えられた。
- ・資源動態モニタリングを行い、漁況予測を行っている。



写真3 隼野の発表の様子

シュロ盆、スライドグラスからの脱落卵について

(地独)道総研 さけます・内水面水産試験場
真野 修一

- ・1枚あたり30gの卵を6枚の未使用のシュロ盆に付着させ、定期的に脱落した生卵、死卵を計数した。
- ・1枚あたり30gの卵を6枚の使用済みのシュロ盆に付着させ、定期的に脱落した生卵、死卵を計数した。
- ・70gの卵を80枚のスライドグラスに付着させ、定期的に脱落した生卵、死卵を計数した。
- ・使用済みのシュロ盆は未使用に比べて付着率が高く、脱落率が低い、生卵の割合が低かった。
- ・スライドグラスはシュロ盆に比べて付着率は高いが、脱落率が高い、生卵が多く脱落する。

小川原湖、十和田湖に於けるワカサギの漁獲状況につ

いてに

青森県産業技術センター 相坂 幸二

- ・小川原湖の平成元年以降の漁獲量は、300~660トンで安定している。船曳網による漁獲量を50kg/日に制限している。近年、価格低迷などの問題が発生している。
- ・十和田湖ではヒメマスが観光資源として主要魚種となっている。ワカサギはヒメマス資源安定のための駆除を目的として漁獲されている一方、安定した価格で取引されている。

河口湖の流入河川におけるワカサギの自然産卵について

山梨県水産技術センター 岡崎 巧

- ・河口湖でのワカサギ生産量は1969~1982年には18~61tだったが、1985年以降は不漁が続いている。
- ・1988~1993年の調査から、初期減耗によることが明らかになった。自然産卵の減少も一因として挙げられているが、産卵の実態については検討されていない。
- ・2009年、2010年にトンネル工事の影響で水量が増加した河川へ大量に遡上し、自然産卵が確認された。
- ・急逝した芦之湖漁業協同組合橘川事務局長に哀悼の意を表する。

諏訪湖とワカサギを取り巻く最近の状況

長野県水産試験場 築坂 正美

- ・水産試験場ではワカサギ資源量推定のため、魚群探知機調査、諏訪湖漁業協同組合が採捕した魚の測定をしている。
- ・水産試験場諏訪支場が平成20年から実施しているアユのピン式ふ化方式を基本に、諏訪湖漁業協同組合が平成22年からワカサギ種卵に適用し、従来のシュロ枠に付着させたものに加えて粘着性を除去した発眼卵の出荷を行っている。
- ・平成15年頃から冬期、魚食性ガンカモ類のカワアイサの飛来が増加している。カワアイサの胃内容物からワカサギが確認されており、被害が懸念されている。
- ・平成15年から浮葉植物ヒシの調査をしている。湖におけるヒシ帯の総面積は変化していないが、密度の高い面積が増加している。ワカサギ資源への影響は不明だが、外来魚の駆除、漁船の航路に影響を及ぼしている。

書斎で可能な、ワカサギ受精卵の観察日記(2010)

前牛久沼漁業協同組合顧問 吉田 義明

- ・ワカサギ受精卵のふ化作業には、さまざまな形態がある。受精卵を付着させたシュロ枠を湖水に直接浸漬する従来法は、手探り状態が難点のひとつであった。

・受精卵(胚)の発生段階及び発眼状況並びに仔魚ふ出の時期に関する、何らかの手がかりを得て、暗中模索状態を改善するための手法開発を目的に、室内ピーカー観察を実施した。

・ワカサギ増殖事業の実務者が、自宅で、家庭環境で整う道具を用いて、簡便に実施できることがわかった。

ワカサギの耳石による年齢査定に関すること

群馬県水産試験場 品川卓志

・ワカサギは耳石の日周輪を計数することで年齢を推定できるが、全ての日周輪を数えることは大変な労力を要する。日周輪の全数計数を行う方法と、一部の日周輪を計数し、当歳魚と越年魚を区分する方法(簡易法)の精度を検討した。

・日周輪の全数計数は一部計数不能区間があったが、簡易法の結果と合致した。

・簡易法で当歳魚と越年魚の区分を行う場合、区間の選択は大きな影響を与えない。

ワカサギ仔魚の飼育環境下における消化速度

(独)水産総合研究センター中央水産研究所

坂野博之

・ワカサギの資源変動が大きい原因に初期生活期の減耗がある。飢餓耐性を把握するためにふ化仔魚の消化速度を求めた。

・ふ化後7日齢、50日齢の仔魚を異なる水温の水槽に入れ、S型ワムシを与え、定時的に採集し、消化管内にあるワムシを計数した。

・ワムシの消失速度は、水温が高いほど早く、ふ化後50日齢よりも7日齢の方が早かった。消化速度は水温依存的・サイズ依存的に決定していることが示唆された。

ワカサギ利用実態調査:概要、途中経過、今後

(独)水産総合研究センター中央水産研究所

坂野博之

・日本各地の湖沼でワカサギが移植され、広く利用されているが、その種卵はいくつかの限られた湖沼からの移植による。

・ワカサギ資源利用規模を解明し、国民のニーズを把握するため、また、卵の受給状況、資源の利用実態を明らかにするため、都道府県、全国の漁協等にアンケート調査を行った。

・これまでに35同県251地点で利用されて、各地での利用状況、採卵状況等が大まかながら把握できた。

・今後、実際にワカサギを取り扱っている事業所に利用状況、卵の移動状況を問い合わせる予定である。

発表のあと、講演、話題提供についての質疑応答及び意見交換が行われました。最後に、来年度は北海道が幹事となり、網走市で開催されることが了承されました。

閉会后、会場を別に移し参加者一同が夕食をとりながらの意見交換会が行われました。お酒が入ったこともあったため前橋テルサでの意見交換とは違い、和やかにまたは熱く語り合いました。9ヶ月ぶり、またはそれ以上に久しく会っていない方々もいたようですが、予定の時間となっても話は尽きず、時間を延長しての意見交換会となりました。

翌日、マイクロバス、自家用車等で高崎市箕輪町にある鳴沢湖に集まり視察しました。初めに高崎市役所産業課の飯島課長から概要を説明していただきました。鳴沢湖は昭和25年に竣工した人造湖で、平成15年から冬季のワカサギ釣り場として賑わっているそうです。視察日は平日の小雨の中にもかかわらず十名ほどの方がワカサギ釣りを楽しんでいたらしいです。また、ここは高崎市が管理しているのですが、地方自治体が直接管理するというのは全国的にも珍しいそうです。



写真4 鳴沢湖の釣棧橋

視察後、自家用車で参加された方々は現地で解散となりました。私たちは高崎駅でマイクロバスを降り、帰路につきました。

次回、平成23年度は北海道が幹事となり、「ワカサギに学ぶ会」発祥の地である網走市で開催する予定です。開催日や次第が決定しましたらお知らせしますので、多数の方々の御参加をお待ちしています。

(まの しゅういち:道東内水面室研究主査)

(はやの ひろふみ:道東内水面室研究主幹)